

平成 30 年度

障害のある人を対象とした演劇ワークショップ

検証報告書

～福岡県内 A 小学校「演劇コミュニケーション講座」と、

「スペシャルオリンピックス日本・福岡 表現プログラム」

を事例に～

九州大学大学院芸術工学研究院長津研究室

目次

0. はじめに	5
1. 概要.....	6
1) 研究目的	6
2) 研究方法と本報告書の構成	6
3) 事例概要	7
2. 分析①：ファシリテーターの役割.....	9
1) 場面分析①アーティストではない人によるファシリテーション	9
2) 場面分析②参加者によるファシリテーション.....	10
3) 場面分析③ファシリテーターの指示とのズレ.....	13
4) 場面分析④その場の目的からズレた行為.....	14
5) 場面分析⑤ズレる「場」の生成.....	16
3. 分析②：協働先にとってのワークショップ	21
1) 福岡県内 A 小学校の場合	21
2) スペシャルオリンピックス日本・福岡の場合.....	24
3) まとめ	27
4. 分析③：ワークショップの運営.....	28
1) ワークショップが実施されるまでの企画プロセスについて.....	28

2) 現場での役割分担.....	28
3) 浮かび上がった課題：ワークショップを目的化しないために	30
<u>5. 考察.....</u>	<u>31</u>
1) 障害のある人を対象とした演劇ワークショップをめぐる社会的背景	31
2) ワークショップへの今後の期待.....	32
3) ワークショップの検証方法について	34

0. はじめに

「スペシャルオリンピックス日本・福岡 表現プログラム」最終回のこと。

ワークショップの当初はファシリテーターの側にも、参加者の側にも、手探り感が見受けられたが、回を重ねるごとにどんどん打ち解けてきているような雰囲気を感じていた。本番を乗り越え、好評につき2ヶ月後にあるコミュニティ・ダンスのフェスティバルまでワークショップの継続が決まった最終回。本番の映像を見ながら全員で振り返りを行っていた。おやつを食べながら、思い出話に花が咲く。

ある参加者が、ふと呟いた一言が、ファシリテーターの涙を誘った。

「自分、ひとつ思ったのが…、仲間って、すごいんだなって。そういうふうに思った。いろんなところでも仲間がいるし、ここにも仲間がいるし。3月は残念ながら、出られないけれど、練習だけでも参加します。」

劇場は社会包摂の機能を有する、と叫ばれて久しい。まさにこの瞬間、参加者にとってこの場は、ある種の居場所として機能していた。

なぜこの参加者は、文化施設のひとつの部屋に集う、3ヶ月前は知らなかった人々のことを、おおよそ2週間に1回、1時間ずつしか会わない人々とのことを、「仲間」と呼んだのだろうか。なぜ、このような連帯感を生み出すことができたのだろうか。

本報告書は、2つのワークショップを追い、多様な人々が集い表現する場におけるファシリテーションとそのコーディネートについて記述することで、今後、芸術家によるワークショップの現場で、たくさんの「仲間」が生まれる瞬間を願って、執筆するものである。

1. 概要

1) 研究目的

本研究は九州大学大学院芸術工学研究院長津研究室における、NPO 法人アートマネジメントセンター福岡からの受託研究「障害のある人を対象とした演劇ワークショップの検証方法に関する研究」の報告書である。2018年9月～2019年1月に福岡県内で行われた2つのワークショップを事例とした分析を通じ、演劇ワークショップに期待されているものについてや、それらを検証する視点についての考察を行うものである。なお本事例は前年度に同一主体により実施された特別支援学級における演劇コミュニケーション講座の後継プログラムであり、研究報告書¹ならびに研究論文²としてまとめた内容の続編となる。

2) 研究方法と本報告書の構成

研究開始時に、依頼元である NPO 法人アートマネジメントセンター福岡との打ち合わせを経て、研究をするうえでの視点を2つに整理した。

1点めは、「ファシリテーション」である。演劇ワークショップの現場において「ファシリテーター」と呼ばれる人々がどのように振舞っているのか、またファシリテーターではない人が場の動きを促進するような場面で何がおきているのかを分析することにより、多様な表現の場を支える条件について考察することを目指すこととした。これらは「2. 分析①：ファシリテーターの役割」で考えてゆく。

2点めは、「コーディネート」である。多様な表現の場を支えるためにどのようなコーディネーターが求められるのかを、実際の現場でおきていることや事前・事後のインタビューなどを通じて明らかにすることとした。これらは「3. 分析②：協働先にとってのワークショップ」「4. 分析③：ワークショップの運営」で考えてゆく。最後に「5. 考察」で、昨今の社会状況を踏まえ、全体をまとめた考察を行う。

なお分析にあたっては、ワークショップすべての日程に、研究チームで分担しながら観察

¹ 長津結一郎（監）『平成 29 年度特別支援学級における演劇コミュニケーション講座検証報告書』九州大学大学院芸術工学研究院長津研究室、2018 年

² 長津結一郎、中山博晶、松井志穂「演劇ワークショップの社会包摂的側面への期待とその実際：特別支援学級における演劇ワークショップを事例に」、『芸術工学研究』第 29 号、2018 年、pp.21-31

を行った。本報告書はそのフィールドノートに加え、2台のビデオカメラにより撮影された映像を用いた相互行為分析、事前事後のインタビューを組み合わせた手法で分析を行った。

3) 事例概要

本事業は、以下2事例についての検証である。

○福岡県内 A 小学校特別支援学級における「演劇コミュニケーション講座」(2018年9月～10月)

本事業は、福岡県立ももち文化センターから自主事業等の業務委託を受けている NPO 法人アートマネジメントセンター福岡がコーディネートを行い、福岡県人づくり・県民生活部文化振興課を經由し、福岡県教育庁義務教育課との連携により実施された。またファシリテーターとして福岡県内で活動する演劇・ダンス分野のアーティスト4名を招聘している。なお本報告書では学校側の要望により、学校の名称を匿名化して記述する。

プログラムは、特別支援学級における「自立活動」という科目の一環として、全学年の児童が参加するものとして設計された。以下は基本データである。

日時 2018年9月20日、10月2日、10月17日 45分授業×2コマ連続(計90分)

場所 福岡県内 A 小学校

ファシリテーター 4名

メイン進行 五味伸之(のぶお)

アシスタント 山下キスコ(キスコ) 山本泰輔(もってい) 古賀今日子(こがきよ)

児童 20名

教職員 5名(教員3名、介助職員2名)

検証者 2～3名(回によって異なる)

主催者等 2名

○「スペシャルオリンピックス日本・福岡 表現プログラム 演劇&ダンスワークショップ」(2018年10月～2019年1月)

本事業は、福岡県立ももち文化センターから自主事業等の業務委託を受けている NPO 法人アートマネジメントセンター福岡がコーディネートを行い、福岡県人づくり・県民生活部文化振興課の紹介によりスペシャルオリンピックス日本・福岡との協働で実施された。またファシリテーターとして福岡県内で活動する演劇・ダンス分野のアーティスト4名を招聘している。

なおスペシャルオリンピックスとは、知的障がいのある人たちに、日常的なスポーツプログラムと、その成果の発表の場である競技会を、年間を通じて提供し社会参加を応援している国際的なスポーツ組織である。日本では、1994年に活動が始まり、1996年に福岡地区組織としてスペシャルオリンピックス日本・福岡が設立された（2013年にNPO法人化）³。

参加者はスペシャルオリンピックス日本・福岡で普段から活動する障害のある人（「アスリート」と呼ばれる）だけでなく、ひろく一般に参加者を募った。以下は基本データである。

日時 2018年10月5日～2019年1月11日 全11回

場所 福岡県立ももち文化センター小ホール（1月5日・6日のみ なみきスクエア）

ファシリテーター 4名

メイン進行 五味伸之（のぶお）、そら

アシスタント 山下キスコ（キスコ）（もってい） 古賀今日子（こがきよ）

参加者 20名

検証者 1～3名（回によって異なる）

主催者等 2名

詳細なワークショップの記録は資料を参照のこと。

なお本報告書に記載している参加者の呼称については、小学校については前述の理由により公表の許可を取っていないので記載しない。「スペシャルオリンピックス日本・福岡表現プログラム」の参加者については事後に公表の意思確認を行い、画像・呼称（ワークショップの際にそれぞれが自身につけていた「呼び名」）の使用許可をいただいているもののみを使用している。

³ スペシャルオリンピックス日本・福岡についての記述は「スペシャルオリンピックス日本・福岡」のウェブサイトを参考にした。<http://www.son-fukuoka.gr.jp/>（2019年3月29日最終確認）

2. 分析①：ファシリテーターの役割

本章では、障害のある人との演劇ワークショップにおける「ファシリテーション」について考察する。ワークショップの現場で執筆したフィールドノートと記録映像をもとに複数の研究メンバーの視点で分析を行い、ファシリテーター等にインタビューを行うことで状況を多面的に把握するように心がけた。

1) 場面分析①アーティストではない人によるファシリテーション

○概要

スペシャルオリンピックス日本・福岡 表現プログラム 第7回

日時 : 2018年12月21日(金) 19:00~20:05

場所 : ももちパレス 小ホール

メイン進行 : 野中香織(そら)

アシスタント : 山下キスコ(きすこ)

参加者 : たいせい、かずき、こうすけ、あいこ、ひでき、Yuri、だいちゃん、たけちゃん、ばんちゃん・・・9名

見学(参加) : 縣博夫さん(福岡県人づくり・県民生活部文化振興課)

○事例状況

前回(第6回)のワークショップで、参加者はそれぞれ描いた絵を自分の身体で表現することに挑戦した。そして、今回は、その各参加者が表現したものをつないでいき、チームで一つの動きを作ることに挑戦することになった。そして、この場面は、みんなで一通り動きを決めた後に、チーム同士で見せあった時の様子である。

○場面の選定理由と記録

アーティストによるファシリテーションを分析していく前に、このワークショップで見られたアーティストではない人の「ファシリテーション」を取り上げたい。具体的には、このワークショップの実施に大きな役割を果たした福岡県人づくり・県民生活部文化振興課の縣博夫さんの振る舞いに着目したい。その理由は、アーティストと縣さんの参加者に対する振る舞いを比較することで、アーティストによるファシリテーションの特徴を浮かび上がらせることができるのではと考えたためである。縣さんは、参加者たちが全体の流れについていけないと感じた際に、手招き、声かけ、参加者の身体を引っ張る、などの方法で

具体的な指示を与えていた。詳細な記録は資料を参照のこと。



図 1-1、1-2 第7回ワークショップの様子（記録映像からのキャプチャ）

○分析

縣さん（P）は、他の参加者に対して何かしらの介入を行っている。特に、話し合いで決められた動きとは別の動きをしているこうすけ（P）に対して、こうすけ（P）の身体に直接触れながら立っている位置を移動させたり、手や声で次の動作を指示したりしている。確かに、は、話し合いで決められた動きとは別の動きをしていた。練習と本番の間でこうすけ（P）の動きに生まれた「ズレ」に対して、縣さん（P）は介入していた。こうした「ズレ」に対する縣さん（P）の介入は、「ズレの修正」として捉えられるだろう。

「ズレ」と、その「ズレ」への対応は、このシーンに限らず、ワークショップの中で頻繁に見受けられる。その上で注目したいのは、縣さんは生起する「ズレ」に対して何度も「修正」を行ったのに対して、他の場面でアーティストたちは「修正」だけではない介入を行っている点である。そして、「ズレ」に対する様々な介入のあり方が、アーティストによるファシリテーションの特徴であると考えることができる。次項では、そうした「ズレ」に対するファシリテーターの働きかけを見ていく。

2) 場面分析②参加者によるファシリテーション

○概要

スペシャルオリンピックス日本・福岡 表現プログラム 第1回

日時 : 2018年10月5日(金) 19:00~20:02

場所 : ももちパレス 小ホール

メイン進行 : 野中香織(そら)

アシスタント : 五味伸之(のぶお) 山下キスコ(きすこ)、古賀今日子(こがきよ)

参加者 : かずき、こうすけ、あいこ、ひでき、Yuri、だいちゃん、

たけちゃん、他1名・・・8名

○事例状況

スペシャルオリンピックスのワークショップ初回、身体を使ったコミュニケーション・ワークショップを行なっている。ワークショップ参加者と、アシスタント・ファシリテーターが、2人1組になり、両手のひらをお互いに合わせて立つ。1人がリーダーになり、その人が主導して手を動かしながら歩く。もう1人はリーダーの動きに合わせてついていく。初めは身長の高い人がリーダーになって動き、途中でそらの呼びかけによりリーダーは交代した。そのあと、フロア全体をワークをするグループとそれを鑑賞するグループの2つに分けて、それぞれの動きを、途中で役割を入れ替えながらお互いに見合った。全員で感想を言い合った後、そらは“全員で回るワーク”を行った。

○記録

今回このワークにおける Yuri とこがきよのペアに着目する。他の参加者のペアはただ手を合わせて動いているだけなのに対して、この場面での2人には、“回る”という、他の人たちの動きとは明らかに異なる動きがあった。この“回る”という動きが、ファシリテーターや他の参加者に影響を与えていく様子が観察された。最初に手を合わせて“回る”ことを試みた際には、“回る”ところにまで至らなかったが、そのあともう一度同じワークをやった際にうまく“回る”ことができ、それを見ていた他の参加者からの賞賛の声があがるという場面であった。詳細な記録は資料を参照のこと。



図 2-1、2-2 第1回ワークショップの様子（記録映像からのキャプチャ）

○分析

後日行ったインタビューにて、こがきよはこの時のことについてこう述べている。

回ると思っていたかはわからないが、ぐーっ、と動く動きは、こう、ゆりちゃんが行きたがっては戻り、行きたがっては戻り、ということを繰り返して、最後、あー、となった。

このことから、この動きは Yuri 主導で行われた動きであったことがわかる。

また、このワークの後、“全員で回るワーク”が行われる。ファシリテーターのそらは後日行ったインタビューで以下のような発言をしている。

私がゴムのワークをしようと、本当は計画していて。おっきなゴムを持ってくる予定だったんですよ。それを私が忘れたんです。(中略)で結果的にこれがその代わりになったねっていうのが。その、回ってたからゆりちゃん、それで、じゃあみんなのできるから。そのみんなでやってみようと思った記憶があります。

このことから、このワークは Yuri のワークを見て、その場で思いついたワークであったことがわかる。

またこの日行われた“手を合わせるワーク”は、第3回目のワークショップでも実施されている。この時参加者たちは誰から指示されるわけでもなく、第1回で Yuri たちが行った“回る”という動きを何度も行なっていた。

本シーンからは、1人の参加者のワーク中での行動が、ファシリテーターや他の参加者に影響を与えている様子が伺える。“全員で回るワーク”は明らかに Yuri たちの直前のワークでの動きの影響を受けており、また第3回のワーク時には第1回での Yuri・こがきよペアの“回る”という動きを他の多くの参加者が行っていた。これらのことから、ワーク中のファシリテーターと参加者は、単に教える、教えられるというような一方向的な関係ではなく、互いに面白いと思う表現を共有し、影響を与え合うような関係であったことがわかる。

類似する事例は A 小学校でのワークショップでもみられた。次は小学校での事例を、ファシリテーターの視点から紹介する。

3) 場面分析③ファシリテーターの指示とのズレ

○概要

演劇コミュニケーション講座 第1回

日時 : 2018年9月20日(木) 10:14~11:55

場所 : A小学校

メイン進行 : 五味伸之(のぶお)

アシスタント : 山下キスコ(きすこ) 古賀今日子(こがきよ) 山本泰輔(もつてい)

参加者 : たいせい、かずき、こうすけ、あいこ、Yuri、だいちゃん、
たけちゃん、ちあき、ちひろ、他2名・・・11名

○事例状況

身体の一部をくっつけて図形を描くワークの場面。参加者が2人組をつくり、ペアの相手と身体の一部をくっつけた状態で、くっつけた部分を支点に、出されたお題の形を描くというものである。

○記録

このシーンで今回注目するのは、MさんとTさんである。身体の一部をくっつけた状態で長い丸を描くというワークの発表の場面で、MさんとTさんが、手をつないで教室を大きく歩き回るといった行動をとった。それに対して、ファシリテーターが驚いた反応を示していた。詳細な記録は資料を参照のこと。

○分析

この場面では、ファシリテーターが想定していなかった動きを子どもたちがしたこと、新しい発想に出会った場面であると言える。こういった**新しい発想や表現方法に出会うことは、芸術家にとっては、普段の芸術活動ではなく、ワークショップという場に携わることの利点の一つである**と考えられる。⁴

このような「ズレ」は他のワークでもよく見られた。次に見るのは、ファシリテーターが考えていたワークの目的からの「ズレ」と、それへの対処である。

⁴ 本節の記述は、研究メンバーでもある松井志穂による次の論文の記載内容をもとに記述した。松井志穂『芸術のアウトリーチ活動を捉えなおす：ワークショップの現場で起こるアーティストの意識変容』九州大学大学院芸術工学府提出修士論文、2019年

4) 場面分析④その場の目的からズレた行為

○概要

スペシャルオリンピックス日本・福岡 表現プログラム 第3回

日時 : 2018年10月26日(金) 19:00~20:06

場所 : ももちパレス 小ホール

メイン進行 : 野中香織(そら)

アシスタント : 五味伸之(のぶお) 山下キスコ(きすこ) 古賀今日子(こがきよ)

参加者 : 名

○事例状況

人の腕の可動域を確認するという目的で行われたワーク。ワークショップ参加者と、アシスタント・ファシリテーターは2人1組になり、片方が床に座る。そしてもう片方が立って、その人の腕をあらゆる方向に引っ張る。その後、座る人・引っ張る人を交代して再び行った。

○記録

このシーンで今回着目したのはこうすけ・のぶおペアの動き、特にこうすけが引っ張られる役、のぶおが引っ張る役になっていた時の動きである。このワークにおける2人の動きは明らかに他の参加者のペアとは異なっており、ワークの目的とも異なるものであった。この場面では、参加者だけでなくファシリテーター自身も目的からはズレた行為をしていた。詳細な記録は資料を参照のこと。

○分析

最初に、ワーク中のこうすけ・のぶおペアが、他のペアとどのように異なっていたのかについて記述する。こうすけに関して言えば、他の参加者の多くが「痛い」などの言葉を発している中、どの方向に腕を動かされても痛そうな素振りを見せていなかった。これはこうすけが腕の関節や体の位置をうまくずらすことで、痛くなるのを回避していたことによるものと考えられる。こうすけのこの行動は、腕の可動域を確認するという、ファシリテーターが示す当初の目的からはズレている。



図 3-1 (左上)、3-2 (右上)、3-3
第 3 回ワークショップの様子
(記録映像からのキャプチャ)

のぶおに関しては、こうすけの腕を動かさず中で何度も転ぶという行為をしていた。本来動かされるのは座っている人であるのに、立っている人が転ぶ、というのは、ワークの目的からはズレた行動になる。

後日行ったインタビューでのぶおは以下のように述べている。

俺がなんかこうやられている風に倒れれば、合気道が強い人みたいに見えるんじゃないかみたいに思って、自分でこう…、すってんころりんって何回かしてたって感じだと思います。

このことからのぶおは、積極的に転ぶよう動いていたことがわかる。そしてこの 2 人の動きを見ていたそらは「とっても面白い」と言い、参加者全員にこの 2 人のワークの様子を見せる。この時のこうすけは、もはやのぶおを引っ張り返しており、可動域を確認するという内容とはかけ離れた動きとなっていた。

本シーンからはファシリテーターが、ワークの目的に合うような正しいことを参加者が行うことには重きを置いていないことがわかる。本ワークでのこうすけ・のぶおペアは明らかに目的からはズレた行為を行っていた。メイン進行のそらはそれを修正しようとするのではなく、むしろ肯定的な評価をして 2 人の様子を全体で共有した。後に行ったインタビューでそらは以下のような発言をしている。

こっちがいくらこうしようと思ってもそうならないことってあるじゃないですか。そこですよね、なんか、そうなっちゃうっていうのを、そのままお届けしたい。(中略)何かわからないことに興味がある。わかりきったものにはあまり目が向かない。だって目で見てわかるから。そうじゃないことを見たい。

この発言からも、ファシリテーターは、当初示していたワークの意図から参加者が「ズレ」ていくことに対して、ある種の面白みを感じていたことがわかる。

次にみる場面は、こうした「ズレ」が複数かつ顕著に起きている例である。

5) 場面分析⑤ズレる「場」の生成

○概要

スペシャルオリンピックスワークショップ 第4回

日時 : 2018年11月2日(金) 19:00~20:08

場所 : ももちパレス 小ホール

メイン進行 : 野中香織(そら)

アシスタント : 山下キスコ(きすこ)

参加者 : たいせい、かずき、こうすけ、あいこ、ひでき、Yuri、だいちゃん、たけちゃん、ちあき、ちひろ、あやな、他1名・・・12名

○事例状況

ワークショップ参加者をAとBの2つのグループに分け、それぞれのグループ内で順番を決め、一人ずつポーズを作って並んでいく。ただし、自分の前の人と身体の一部を接触させて、ポーズを作らなければならない。ポーズをつなげていき、壁の端から端まで行けば終了となる。ワークのポイントとして、順番が一巡して最後尾に移動する際は、人と接触している部分から「抜けるように」ポーズを崩すことが求められる。また、身体のようなパーツを接触させることも求められる。

ファシリテーターのそらは、全体の動きを見ながら、参加者にアドバイスや指示を行い、きすこは、Aチームに入り参加者と一緒になってポーズを作り並んでいく。最初に、きすことそらがお手本を見せ、その後、A・Bチームどちらも同時にスタートした。

○記録

今回は、Bチームの動きと、ファシリテーターそらの応答場面に着目する。その理由は、生じた「ズレ」と、その「ズレ」に対するファシリテーターの対応が重層的に表出した場

面であったためである。詳細な記録は資料を参照のこと。



上から図 4-1、4-2、4-3

第 4 回ワークショップの様子

(記録映像からのキャプチャ)

○分析

まず、この場面で、ファシリテーターからは①壁の端から端まで行くこと、②身体のどこか一部分を相手とくっつけること、③くっついている部分から「抜ける」ように離れること④色んな身体のパーツを使うこと、⑤相手が止まったら動き始めること⑥誰かと同じポーズはしないこと等が要求されていた。ところが、参加者の振る舞いは、ファシリテーターの指示とは異なったものになっていく。例えば、この事例の冒頭で、最初の参加者は壁の端からスタートせずにポーズを作った。そして、2番のひでき (P) は、向かうべき壁の端とは反対方向にポーズを作った。ここで、そら (F) が、ひでき (P) に対し声をかけるが、②の

場面でもひでき (P) は同じように反対方向にポーズを作ろうとした。このように、ワーク中は、ファシリテーターの指示とは異なる参加者の振る舞いが生起している。

では、こうした「ズレ」に対し、ファシリテーターはどのように対応したのか。図5は、①の場面におけるファシリテーターの対応パターンを図式化したものである。

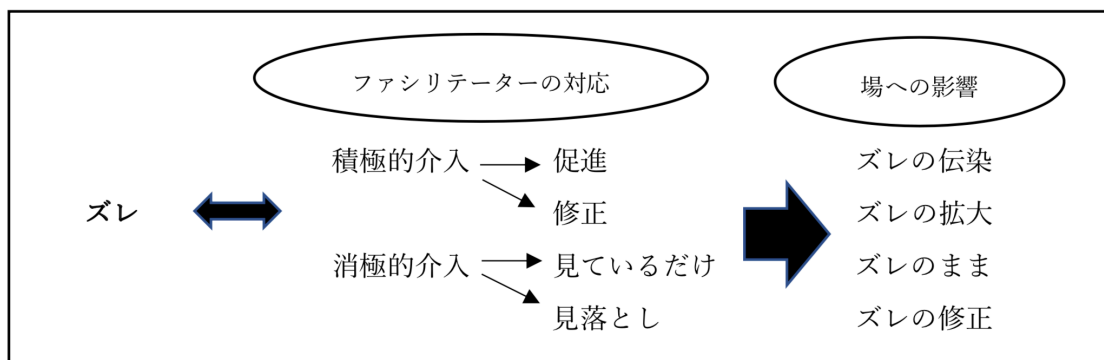


図5 ズレの対応パターン (中山作成)

図5における「促進」は、参加者の振る舞いにおける「ズレ」を褒める行為を指している。例えば、①の場面で、そら (F) は、ちひろ (P) が右足をあげてだいちゃん (P) の頭に触れようとしているのを見て、「おお、よく触るね。そうそうそう。すごい。挑戦者が現れました。」と声をかけている。この場面におけるちひろ (P) の振る舞いは、ファシリテーターが想定していなかったものであるが、その「ズレ」をポジティブに評価していたようである。一方で、「ズレ」はポジティブな評価を受けるだけのものではなかった。冒頭のひでき (P) の動きに対して、そら (F) は「前々、こっちにつながる」と言いながら、ひでき (P) の動きを修正した。ひでき (P) も、そら (F) の指摘を受け、振る舞いを修正している。このように、ファシリテーター、参加者の振る舞いの「ズレ」を修正しようとする場面も見られた。

以上のようなファシリテーターによる積極的な介入がある一方で、①の場面では、積極的に促進／修正されない「ズレ」も見受けられた。例えば、こうすけ (P) が、自分の番ではないにもかかわらずポーズを崩してしまい、その様子を見ていたたいせい (P) もポーズを崩すが、このことに対して、そら (F) は何も介入していなかった。こうすけ (P) の様子に、そら (F) 自身が気づいていたかどうかは定かではないが、こうすけ (P) の「ズレ」にファシリテーターが対応しなかったことから、こうすけ (P) の「ズレ」は、たいせい (P) に伝染していた。

では、こうした「ズレ」をそのままにすることは、ファシリテーションの失敗として捉え

られてしまうのだろうか。ここで、②の場面の様子も加えて分析してみたい。

この②の場面では、参加者の中で誰かが立ち上がると同時に、後ろの番の人も立ち上がるという振る舞いが見られた。例えば、たいせい (P) が動き始めるのと同じタイミングでだいちちゃん (P) も立ち上がっていた。前の番の人が身体を止めたら、自分の身体を動かして移動することが求められていたことを踏まえると、こうしただいちちゃん (P) の振る舞いは、「ズレ」として捉えられうる。ところが、こうしただいちちゃん (P) の動きに対して、そら (F) は、修正や促進といった介入は行わなかった。結果的に、だいちちゃん (P) は、たいせい (P) が身体を止めるのを見ると、「よしっ」と言いながら小走りで、たいせい (P) の近くに移動した。

ここで興味深いのは、「ズレ」た振る舞いをしていただいちちゃん (P) が、「よしっ」と言いながら小走りで移動するという、ワークへの能動性を見せたところである。つまり、だいちちゃん (P) の「ズレ」がファシリテーターからの積極的な介入を経ないことで、「ズレ」自体はそのままの状態になってしまったが、一方で、だいちちゃん (P) の能動性を表出させた瞬間でもあったのである。

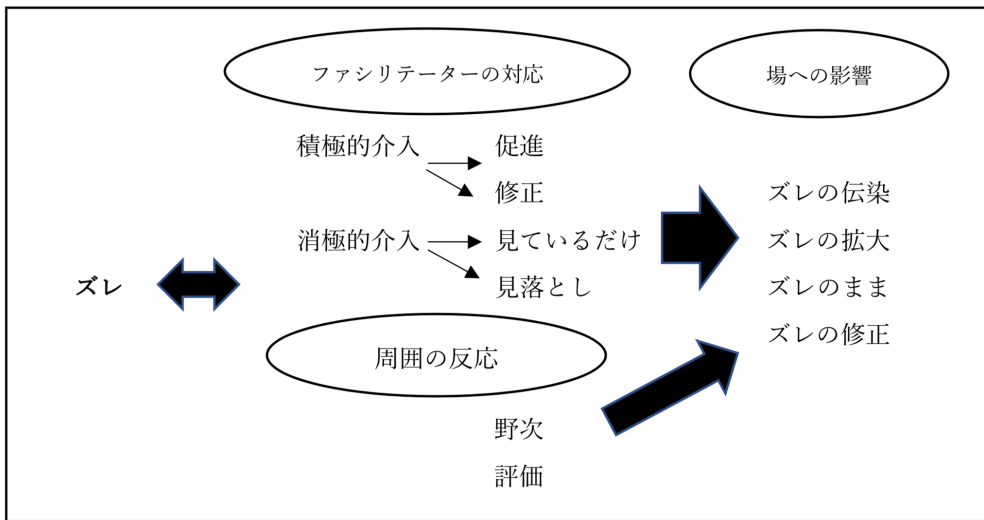


図6 ズレの対応パターンと場への影響 (中山作成)

ここでは「ズレ」が、ファシリテーターの介入を通して、ワークショップの場の中に受容されていく様子が見られた。そして修正されずにいた「ズレ」が、その後、参加者の能動性を表出させる契機になる。一見すると「ズレ」は場のルールを崩す恐れがあるが、「ズレ」がその場で修正されることなく、そのままの状態であることで、こうした場面を生起させたと考えられる。

5) まとめ

多様な身体、多様な認識能力をもつ人が関わるワークショップの場では、ファシリテータ

ーと参加者との応答の中で「ズレ」が数多く生じる。そして、この「ズレ」は、ファシリテーターの介入を通して、ワークショップの場の中に受容されていく様子が数多く見られた。

ファシリテーターたちは、「ズレ」に対して「修正」だけではない介入を行っている。「ズレ」に対する様々な介入のあり方が、アーティストによるファシリテーションの特徴であった。ワーク中のファシリテーターと参加者は、単に教える、教えられるというような一方向的な関係ではなく、互いに面白いと思う表現を共有し、影響を与え合うような関係であることもわかった。また、ファシリテーターは、当初示していたワークの意図から参加者が「ズレ」ていくことに対して、ある種の面白みを感じていたり、何かしらの創造性の契機を感じているようにも思われた。また修正されずにいた「ズレ」が、参加者の能動性を表出させる契機にもなっていた。

このように、「ズレ」を「ズレ」のまま許容するファシリテーションが、多様な人々の創造性を担保し続け、その後のワークショップで多くのアイデアなどを出しやすくする場づくりにもつながったと推察できる。

3. 分析②：協働先にとってのワークショップ

ここからは、「コーディネーション」に着目し、演劇・ダンスのワークショップを行うこととなった協働先の現場がどのようなことを期待していたのかを、関係者の発言を整理する形で示唆することを目指す。

1) 福岡県内 A 小学校の場合

ここでは、事前に福岡県内 A 小学校の先生 5 名と、福岡県文化振興課の職員にインタビューを行った内容から、ワークショップに対して期待していた点を整理するとともに、ワークショップ直後の振り返りの発言から、実際に実現していたことの手がかりを得る。

事前インタビューの結果

先生たちからは、福岡県内 A 小学校では昨年度も同様のワークショップを実施しており、5 名の先生のうち 2 名は昨年度もワークショップを体験しており、事前のインタビューでも雰囲気をよく理解している様子であった。

○ワークショップの現場で起こること

前回のワークショップを振り返り、「身体の動きを通してのコミュニケーションだったから、子どもたちは出しやすかった、意見が言いやすかったと思います」という声があった。言語的なコミュニケーションだけではなく、実際に身体を動かした非言語のコミュニケーションにより、子どもたちの居心地のよさを確保することを期待しているようであった。

また、普段の特別支援学級での指導では開拓できない、子どもたち自身の新たな表現方法の獲得について言及した先生もいた。

その子その子の表現ってゼロじゃないですよ、大事にしたいところもあるので、そんなところがお互いに表現したこと同士が繋がりがあっていって、それが共有して学びになったりしていけばいいなって思ってるけど、なかなか日頃の授業では、特にこういう支援学級ではなかなかそこまで結果としていかないというところがありますね。

そして、福岡県文化振興課の職員からは、こうした活動を通じ生み出されるのは、人と人とのコミュニケーションのあり方に対する学びであるという声もきかれた。

特に人間関係が難しい子どもたちが多いただろうから、彼らにとって人間とどう接したら良いのかというのを自分で考えるきっかけ、こうしちゃだめですよ、そんなこといったらだめですよと言われるのとは違う、そういうところが一番、わかってくれるというのが一番ですね。

このような発言の背景には、特別支援学級で普段「自立活動」の科目として実施しているプログラムを見学したことがある、と職員は語ってくれた。

コミュニケーションをうまく取れる手段をテクニカルに教える、技術なんですよ。技術を中心に教えることになっているので、こうしてはいけないとか、ああしろとか、要は条件反射の世界というか、そういう感じなので、本人が考えさせるとか、何かを掴むきっかけみたいなものは多分そこまで重要視されてないんじゃないかと思うんですね。だから（今回のワークショップでは）、染まりきった小学校に行くんですよ。

このように、身体的なコミュニケーションを通じて表現方法を獲得し、それに基づいて新たな人間関係や、本質的なコミュニケーションのあり方を知ってもらう機会をつくることが期待されている様子がうかがえる。

また、そういった状況が生まれることを下支えしている、触媒としてのファシリテーターのあり方に言及した先生もいた。

ファシリテーターが、化学でいう触媒みたいな形でうまくリードしてやったじゃないですか。五味さんたちが。あれでやっぱり、思った以上の化学反応みたいなものがあつたような気がしました。

○ワークショップの現場からの波及効果への期待

一方、事前のインタビューからも、3回だけのワークショップを実施するだけでは何か大きな変化は得られないのではないか、という声が見られた。

やっぱりある程度先まで見て、日頃の活動として一つ定着するようなイメージじゃないと、なかなか教育に活かすとか出来ないでしょうね。

回数が2~3回じゃ、この場でコミュニケーションを楽しんだらできると思うけど、例えばファシリテーターの方に興味を持ったりとか、すごく楽しかったなって、楽しくしてくれたお兄さんたちは、どんな人たちなんだろうまでは、2~3回じゃいけないかな。これがしょっちゅう会ってたら、どんな人たちなんだろうとか、どんな団体なんだろうとか、そんなとこまで考える子もいると思うんですね。

その一方で、小学校の教員の側など、子どもたちに介在し支援する立場の変化を期待する声は多くみられた。ある先生は昨年度のワークショップを振り返りこのような発言をした。

型にはめようとする私とは違って、すごくやはり子どもたちの表情も心許してるような、認めてもらってる喜びみたいなのがあって、(中略)子どもももちろんすごく自分が出せる時間を持たせてもらって楽しい時間だったと思うし、私は去年はすごく今までの自分が情けなく反省の場にもなったんですね。刺激的でした。

このように、通常の授業の場では「先生／学生」という硬直化した関係性があるのに対して、ワークショップの場が「自分が出せる時間」になっていたことを感じ、**先生たちは「反省」しつつ「刺激」となる場として機能することを期待**しているようであった。

また、別の先生は今後の展望として、

できれば保護者の方とかにも見ってもらって、土日とかいろんなとこでこういう会があれば、そういうのに連れていかれるんじゃないかなと思うんですね。子どもの様子とか。それで回数を増やしていくことでコミュニケーションとかも伸びると思うし。

と、保護者への働きかけを通じて、外で行われている演劇ワークショップなどの場に参画するようなことへの展開可能性があるのではないかということが発言されていた。

振り返りでの言葉

すべてのワークショップが終了したあとの振り返りでは、「光る子が数人であっても出てきたというのはよかったなど。こちらが普段なかなか引き出せていない部分も引き出せたと思う」といった、**普段の学級で見られない子どもたちの姿を見ることができたのがよかった**という声や、「ものを想像するとか、とっさにいろんなことを判断するとか、そんなふう

なものがコミュニケーションと同時に培われる体験ができたのは良かったかなと思った」というような、前述した本質的なコミュニケーションに迫るようなプログラムであったことに価値を見出す声があった。また、見学に来ていた親御さんの反応から、「なかなか通常の参観ではみられない活動だし子どもの姿だった」という声があったことも紹介され、保護者への影響についても言及されていた。

2) スペシャルオリンピックス日本・福岡の場合

ここでは、事前に事務局の盛田美代子さんにお話を伺った内容から、ワークショップに対して期待していた点を整理し、保護者を対象とした事後のアンケートを通じて事後の反応を整理する。

事前インタビューの結果

事前インタビューからは、本ワークショップに期待する点として「機会の選択肢を増やす」「自己表現の機会」「コミュニケーションの機会」といった点が抽出できた。

○機会の選択肢を増やす

障害のある人々が何か新しい活動を始めようという際に、ある程度は周囲の人々が準備するということが必要であると触れたうえで、盛田さんは以下のように述べた。

それを楽しむか、参加するかしないか、楽しいと思うか、もう嫌だからやめるって思うかはその人が判断するとして、まずは、その、いろんな機会の提供、選択肢を増やすっていうか、そこは、ずっと、大事じゃないかなとは思ってるんですよ。(中略) 反応があんまり芳しくなかったからといってそこで止めてしまうと、もしかしたら何回か続けたら増えていたかもしれない、あるいは経験できたかもしれないアスリートの機会を無くしちゃうかなと思うと、そう簡単には止められないというか。

スペシャルオリンピックス日本・福岡では、多様な競技へのアクセスを保障することにより、参加する人々の選択肢を少しでも多くしようとしているという。こうした数多くの競技と同じように演劇・ダンスのプログラムを位置付け、生涯学習への参加の機会について選択肢を増やすことで、参加者たちのこれまでにない一面を見ることを期待しているようだ。

○自己表現の機会

また盛田さんは、こうした取り組みが自己表現の機会につながるという面も期待していた。

スポーツをするのも一つの自己表現だし、演劇だとかダンスとかで言葉を発しなくても、何か手をうごかしたり、視線を合わせたりで…、何ていうんでしょうね、自分の表現ができるかも。ただそれを、相手もきちんと汲みとらなきゃいけないっていうところはあるとは思んですけど。

スポーツも演劇・ダンスもともに、自己表現という意味では共通の意味を持ちうるが、演劇・ダンスの場合は特に「自分の表現」ができるということと、相手が「きちんと汲み取る」ことを期待していると考えているようだった。こうした行為が「自信」につながっていく。

今まで遠慮していたり、なんかちょっと消極的だったのが、こういう風にしていよっていう経験があると、それがまた、他の場面でも出てこないかな。ちょっとした自信になって、他の場面で出てくると、またそれはそれで、その子の日常がもっと楽しいものになるんじゃないかなっていう気はしています。

○コミュニケーションの機会

表現を通じた他者との「関わり」を通じ、何らかの波及効果が生まれることを望んだ発言も多くみられた。その背景には、知的障害のある人たち特有の事情がある。

自分から、表現すること、自分の意思だとか気持ちを表現することを諦めている子もいるんですよ。サインを出しているけど周りの人が気付いてくれない、言葉で言っているけれども言っていることがよく分からないといって相手にされない。そんな経験もあるだろうし、だからそれを、何ていうかな、できる機会とか。反応しない、無表情、無反応だからといって、決してその人、そのアスリートが、関心を持っていないわけではないんです。ただそれが、興味があるんだよ、自分はこうしてほしいんだよ、っていうのを周りの人が分かってくれるまでには、すごく時間がかかるし、アスリート一人ひとり、必要な時間って全然違うので。

自らがした表現が、周りの人たちに受け取られないという経験。このような状況において、

週に1回とか2週間に1回のプログラムを楽しみにして、そこでいろんな人と、上手くコミュニケーションは図れなくても、なんか仲間がそこにいるっていうのを意識しながら何かをやるっていうこともできて、楽しみにもできますし。

というように、場をともにする人々が「仲間」になっていき、

段々その場所が、週に一回とか、なんか、定期的に、自分にとっての居場所になってくるっていうのかな、そういう風に徐々に変わっていくことが見れたら、ちょっとこちら嬉しいなという風には思いますね。

次第に「居場所」になっていくようなプロセスが起こることを期待していたようだった。

事後アンケートの結果から

事後アンケートからは、上記に挙げた中から特に「自己表現の機会」「コミュニケーションの機会」についての言及が多くみられた。

「自己表現の機会」の面では、

自分の思うことを素直に表現すること。どこまで、どうやっても良いのか。本人が理解するのに必要な時間が、終わりの方でようやく解放されてきたように思う。

という意見が見られ、それぞれの参加者のペースに合わせて、進行から置いていかれないよう配慮されたプロセスの設計や、振り返りの設定で自分を客観的に見るきっかけをつくっていることなどがその要因として挙げられていた。

「コミュニケーションの機会」の面では、ワークショップに参加することで新しい発見や自分を解放する瞬間があり良かった、とする声や、

本人なりの理解、咀嚼の仕方で表現したことを、おもしろがって、引き出してくださるスタッフの皆さんの反応が、また本人の自信や満足につながり有り難く思いました。

とあるように、参加者たちがそれぞれ発言することを「待つ」態度が見られたことにより、本人たちの自信を育むきっかけとなっていることが述べられていた。

3) まとめ

2つの協働先についてそれぞれ事前の期待と事後の印象を振り返った。

A 小学校での演劇コミュニケーション講座では、身体的なコミュニケーションを通じて表現方法を獲得し、それに基づいて新たな人間関係や、本質的なコミュニケーションのあり方を知ってもらう機会をつくることが期待されていたとともに、先生たちにとっても「反省」しつつ「刺激」となる場として機能することを期待していた。ワークショップの結果、普段の学級で見られない子どもたちの姿を見ることができたり、本質的なコミュニケーションに迫るようなプログラムであったことに価値を見出す声があがったほか、保護者への影響も示唆されていた。

スペシャルオリンピックス日本・福岡 表現プログラムにおいては、生涯学習への参加の機会について選択肢を増やすことで、参加者たちのこれまでにない一面を見ることを期待する声や、自己表現という面では「自分の表現」ができるということと、相手が「きちんと汲み取る」こと、さらには場をともにする人々が「仲間」になっていき、次第に「居場所」になっていくようなプロセスが起こることを期待していた。ワークショップの結果、それらに対する周囲の人々の満足度は高く、それぞれの参加者のペースに合わせて、進行から置いていかれないよう配慮されたプロセスの設計や、振り返りの設定で自分を客観的に見るきっかけをつくっていることや、参加者たちがそれぞれ発言することを「待つ」態度が見られたことにより、本人たちの自信を育むきっかけとなっていることがその要因にあると考えられた。

4. 分析③：ワークショップの運営

ここからは引き続き「コーディネーション」に着目しつつ、演劇・ダンスのワークショップを行うこととなった現場がどのようなプロセスを経て生まれてきたのかや、実際に実施してみたうえででの改良点についてを整理する。NPO 法人アートマネジメントセンター福岡の事業担当者へのインタビューと、ワークショップ終了後のファシリテーターとの振り返りの発言をもとにして考察を行なう。

1) ワークショップが実施されるまでの企画プロセスについて

まずは、ワークショップが実際に行われるまでにどのような打ち合わせなどのプロセスがあったかを整理することで、企画の立ち上がり方を概観する。

本事業を行ううえでのステークホルダーを図7に整理した。

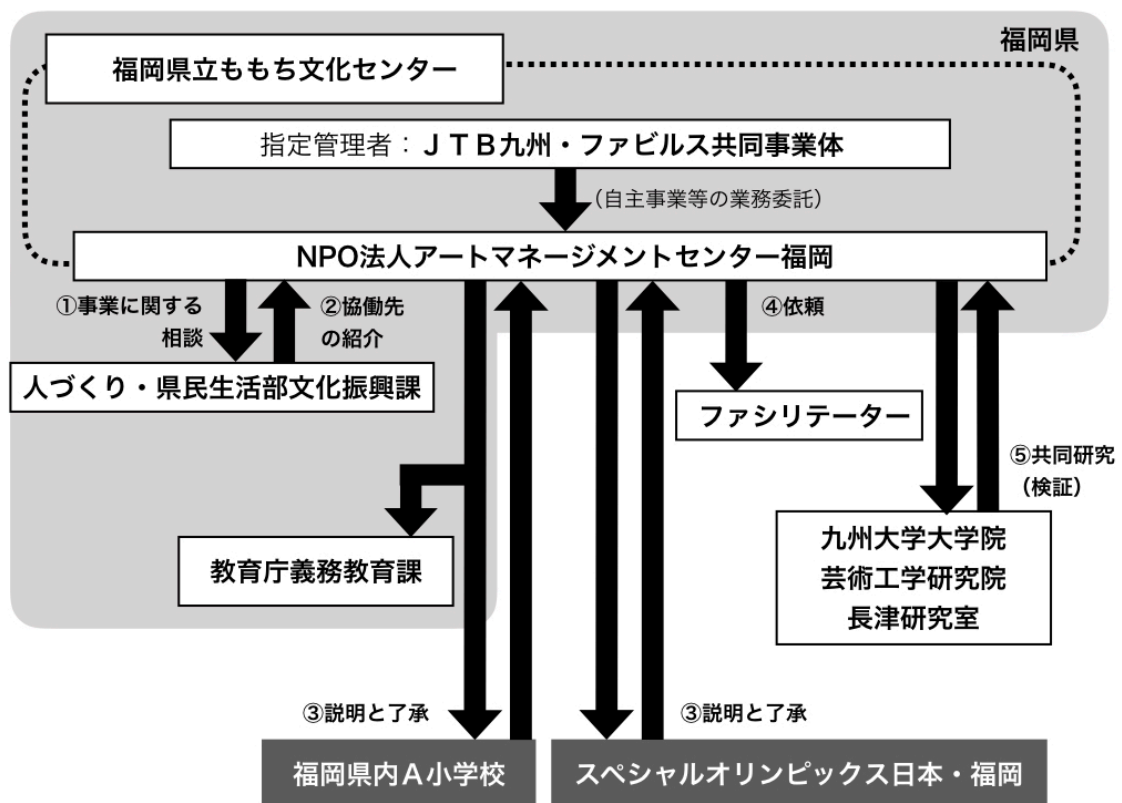


図7 本事業のステークホルダー（長津作成）

2) 現場での役割分担

では、実際のワークショップの現場をつくるうえではどのようなやりとりや役割分担があったのか。それぞれの立場について、図8に整理した。

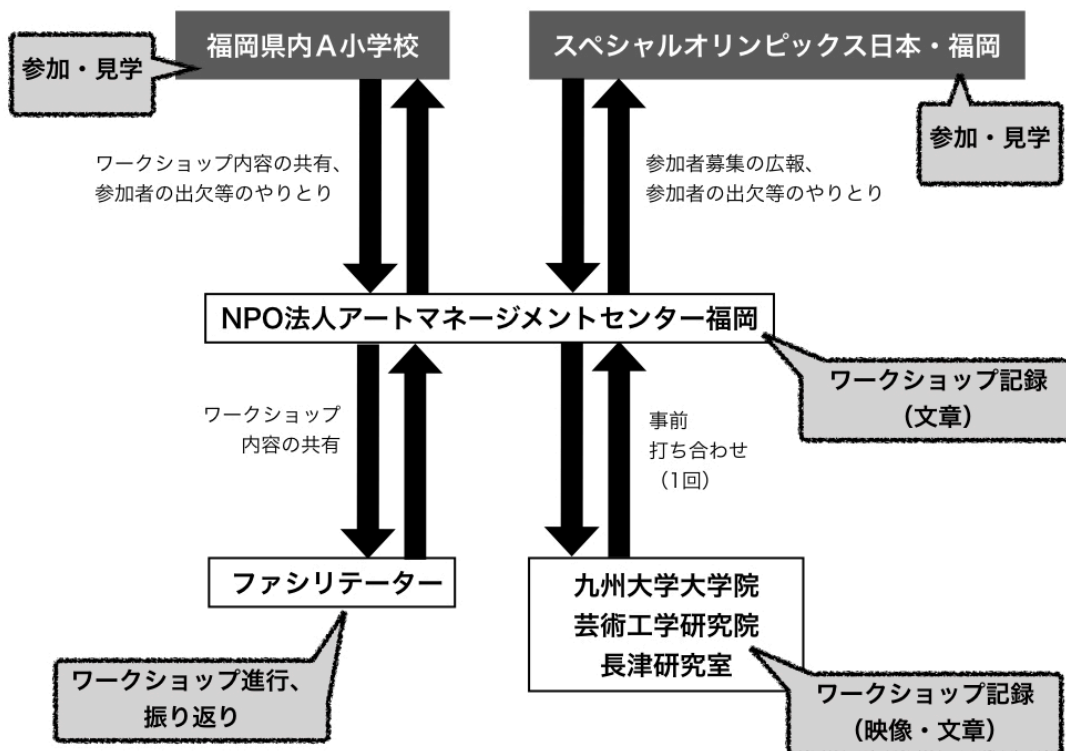


図8 現場でのやりとりや役割分担（長津作成）

まず、事前のやりとりについて整理する。

ファシリテーターと NPO 法人アートマネジメントセンター福岡のあいだでは、ワークショップの内容を事前に共有し、それらを NPO 法人アートマネジメントセンター福岡から協働団体とも共有していた。ただしこれは毎回ではない。小学校でのワークショップにおいて事前に学校側で準備する教材がないか、使用する教材（今回は絵本を用いていた）が教育的配慮の上で使用してもかまわないかどうか、というチェックのために共有をしていた。しかしスペシャル・オリンピックス日本・福岡との協働においては、実際のワークショップの内容について協働先の事前確認等を必要としていなかったため、共有されることはなかった。

ファシリテーター同士の間では、ワークショップの直前・直後に打ち合わせが持たれ、当日のワークショップの進行について最終確認を行っていた。また A 小学校のワークショップの場合は、事後の振り返りは先生を含め全員で行ない、進行はファシリテーターの五味伸之が行っていた。

そのほか、NPO 法人アートマネジメントセンター福岡と協働先とのあいだでは、参加者の出欠（小学校の場合は、当日の急な授業欠席なども含む）の把握、事前広報に関する協

力（スペシャル・オリンピックス日本・福岡のみ）が行われていた。また NPO 法人アートマネジメントセンター福岡と検証者である九州大学大学院芸術工学研究院長津研究室とは、事前に一度検証の方針について打ち合わせを持ち、その打ち合わせにはファシリテーターの五味伸之も同席し、検証の方針について話し合いを持った。

当日の現場では、協働先の団体の参加者やその他の参加者がワークショップに参加や見学をし、ワークショップの進行はファシリテーターが行なった。検証者がワークショップの記録を行うとともに、NPO 法人アートマネジメントセンター福岡もワークショップの記録を行なった。スペシャルオリンピックス日本・福岡表現プログラムの場合は、NPO 法人アートマネジメントセンター福岡が会場の設営や撤収も行なっていた。

3) 浮かび上がった課題：ワークショップを目的化しないために

事後の振り返りから考えると、ファシリテーター同士の打ち合わせに関しては、「打ち合わせのときにテーマについて分析や共有ができたのがよかった」「プログラムの組み立てに時間をかけるというより、そのおおもとの考えを共有することの大切さを感じた」「休憩時間にも方向の確認ができて、とても丁寧に行うことができた」といったような形で、大きな意義があったように見受けられる。

一方、これらの手応えを、コーディネーターや検証者とも共有するという面では、課題も残ったようだった。ファシリテーターからは、打ち合わせの内容をコーディネーターや検証者とも共有する必要は感じつつ、コーディネーターにどのようにプログラムの話に入ってもらいのがよいのか試行錯誤している様子もあった。またコーディネーターからは、事前にプログラムの共有をはかるとしても、どのように現場で振る舞うことをファシリテーターから求められているのかがわからなかった、という声もあがっていた。

詳細な発言は割愛するが、これらの議論からわかるのは、ファシリテーターとコーディネーターや検証者との間のコミュニケーションの方法には改善の余地があるということである。ともすればこうしたワークショップは、ワークショップを実施すること自体が目的化してしまうこともあるだろう。しかし肝要なのは、関わる人々それぞれがワークショップを通じて達成したい目標を定め、それらを立場の違う人々同士が共有するための対話の回路をつくることで、全体でワークショップをともにつくっていくような視点なのではないかと考えられる。

5. 考察

報告書のまとめとして、昨今の社会的状況を踏まえ、本ワークショップの今後の展望について述べる。

1) 障害のある人を対象とした演劇ワークショップをめぐる社会的背景

近年、芸術文化政策の中で social inclusion (=「社会包摂」) が1つの関心テーマとなっている。旧来、social inclusion は、social exclusion (=「社会的排除」) の対概念として用いられる概念であり、国内では「社会的包摂」と訳され、主に失業者・障害者等の労働を通じた社会参加に関連する社会／福祉政策の中で、この言葉が使用されていた⁵。一方で、芸術文化政策では、social inclusion を「社会包摂」と訳し、失業者や障害者、在留外国人等の文化・芸術を通じた社会参加に関連する議論の中で扱われている。

この「社会包摂」という言葉は、2011年2月に出された「文化芸術の振興に関する基本的な方針（第3次基本方針）」で初登場する。

文化芸術は、子ども・若者や、高齢者、障害者、失業者、在留外国人等にも社会参加の機会をひらく社会的基盤となり得るものであり、昨今、そのような**社会包摂の機能も注目されつつある**。⁶（太字筆者）

また、この第3次基本方針を受け、2012年に成立した「劇場、音楽堂等の活性化に関する法律」（通称：劇場法）に関連する議論の中で、劇場等の文化施設が果たす社会的役割の一つに社会包摂が挙げられ、さらに、劇場法を踏まえて2013年に出された「劇場、音楽堂等の事業の活性化のための取組に関する指針」では、劇場や音楽堂等が「社会参加の機会を開く社会包摂の機能を有する基盤として、常に活力ある社会を構築するための大きな役割を担っている」（傍線筆者）と明記された⁷。そして、その後制定された「文化芸術基本法」

⁵ 国内における社会的排除・包摂の議論に関して、岩田正美（2008）『社会的排除 参加の欠如・不確かな帰属』有斐閣、福原宏幸編（2007）『社会的排除／包摂と社会政策』法律文化社を参照されたい。

⁶ 文化庁（2011）「文化芸術の振興に関する基本的な方針（第3次基本方針）」、p3

⁷ 文化庁（2013）「劇場、音楽堂等の事業の活性化のための取組に関する指針（平成25年

(文化芸術振興基本法改正：2017年)の基本理念(第二条)や「障害者による文化芸術活動の推進に関する法律」にも社会包摂概念が反映されており、こうした芸術文化政策の動向を背景に、全国各地の劇場・音楽堂等の文化施設では、社会包摂を目指した芸術文化活動が試みられている。

ところが、社会包摂を目指す芸術活動がどのようなものを指すのか、また、その活動を支えるうえでどのような活動基盤が必要なのかに関しては、研究・実践ともに模索している段階であるといえる。例えば、近年の文化政策における社会包摂の議論を整理した中村美帆(2018)は、アメリカで貧困層の社会復帰を目的とした芸術活動を展開するビル・ストリックランドの言葉を紹介しながら、芸術文化による包摂の可能性を「より主体的な方向に個人意識の在り様を変えられる」点に求めている⁸。また、長津結一郎(2019)は、「障害者による文化芸術活動の推進に関する法律」に関する論点を整理したうえで、この法とそれに伴って作成される「障害者による文化芸術活動の推進に関する基本的な計画」が①「文化芸術における排除の是正」、②「包摂型社会の形成に資する文化芸術像の構築」に向けた議論の契機になることを期待している⁹。このように、近年の文化政策の展開に伴って、芸術文化を通じた社会包摂の可能性と課題が論じられ始めている。ただし、各論者とも、文化政策上の可能性と課題を論じるに留まっているため、今後は、社会包摂を目指した芸術文化活動の実態に即した実証的検証・分析がまたれるであろう。

2) ワークショップへの今後の期待

本報告書でのワークショップの分析を踏まえ、今後も継続して実施できると良い点と、今後さらに検討の余地がある点について述べていく。

○今後も継続して実施できると良い点

今後さらに継続していきたい点は2点ある。

1点めは、今回のワークショップ分析で浮き彫りになった、ファシリテーターの「ズレ」

文部科学省告示第60号)], p1

⁸ 中村美帆「文化政策とソーシャル・インクルージョン—社会的包摂あるいは社会包摂」小林真理編『文化政策の現在2 拡張する文化政策』東京大学出版会, 2018, p98

⁹ 長津結一郎(2019)「芸術と社会包摂に関するこれからの文化政策の課題—障害者による文化芸術活動の推進に関する法律を手がかりに—」文化経済学会第16巻第1号(通算46号), pp20-22

を許容する場の構築である。日常世界において、障害のある人たち（マイノリティ）の振る舞いが、他者（マジョリティ）から「ズレ」として認識されたとき、彼らの「ズレ」はマジョリティの枠組みの中に適応するように修正させられたり、あるいは、枠組みの外に排除されたりするということが起きる可能性がある。換言すると、「ズレ」は、同化・排除を引き起こすトリガーになる可能性があるだろう。それに対し、本事例における演劇・ダンスワークショップの中では、「ズレ」が、「ズレ」のまま場の中に受容されることで、「能動性」の表出や、新たな表現・創作へのきっかけになっていた。非日常世界における出来事とはいえ、こうした「ズレ」への応答を通じた場の在り様から、芸術を通じた社会包摂の可能性が見出される。

2点めは、発表の場を持つことである。今回は詳述できなかったが、「スペシャルオリンピックス日本・福岡 表現プログラム」においては、発表の場が設定されていた。そのことで、発表が近づくにつれ徐々に連帯感が高まり、本番後にはひとつの本番を乗り越えた同志のような感覚が育まれているように見受けられた。こうした発表は個々人にとっても意味があるとともに、発表を通じて他の団体や活動を知るきっかけを得るという点でも重要であったと考えられる。

○今後さらに検討の余地がある点

一方、検討の余地があると思われる点は、おもにコーディネーションの面で2点ある。

1点目は実施回数である。A小学校でのワークショップは昨年度は2回のみ、今年度は3回のみであった。事前の先生方などへのインタビューからも、もうすこし日常的なプログラムとして実施できるとより大きなインパクトのある事業になることを期待する声があがっていたが、これらを実現するには至らなかった。「スペシャルオリンピックス日本・福岡 表現プログラム」においてはその点、実施場所や実施曜日などをある程度固定化することにより継続的な関わりが生み出されていた。学校のプログラムとしてどのように継続的に実施できるかが、今回のワークショップでの成果をさらに広げる足がかりとなるだろう。

2点目はビジョンの共有である。「4. 分析③：ワークショップの運営」で詳述したように、ワークショップを実施することを目的化するのではなく、関わるステークホルダーのそれぞれがこの企画に何を期待するのかをすり合わせ、それらを共有する場をもつことで、より信頼関係を醸成した形でワークショップを実施することを期待したい。そのことで、単にワークショップを成功させるだけでなく、その成功について言語化し発信することによりアーティストのキャリアアップにつながったり、「こんなに面白いのであれば自分のところでも企画したい」といった関係者が現れさらにワークショップの活動の場が増えたりすることも展望できるだろう。

3) ワークショップの検証方法について

最後に、今回の研究手法について検討を行う。

社会包摂をめざした芸術文化活動をどのように評価するのかという議論は、全国的にみても端緒についたばかりだ。社会包摂を目指す芸術活動の評価に関していえば、SROI¹⁰の手法を用いた評価検証が注目を集めている。2017年に公益財団法人日本劇団協議会が出した「芸術団体における社会包摂活動の調査研究」報告書では、岐阜県立東濃高等学校での文学座演劇表現ワークショップの社会的インパクトを SROI の手法を用いて定量的に評価した¹¹。岐阜県立東濃高等学校では、社会包摂にむけた演劇ワークショップ導入以後、中退者と問題行動が減少しており、そのことを貨幣価値換算した結果 SROI の値が「9.86」となっている。この値は、インプットとインパクトの比「1.00」を大きく上回っており、ワークショップの有効性が示唆されている¹²。

こうした定量的な評価は、ワークショップの有効性を客観的に明らかにするうえで重要であるが、一方で課題も想定される。というのも、SROI の手法では、アウトカム（結果）を重視した評価であるために、ワークショップのプロセス（過程）に対する評価には限界がある。社会包摂を目指した芸術活動が、実際どのように行われる必要があるのか、また、こうした活動を支えるファシリテーターや、コーディネーターはいかなる役目を果たす必要があるのかを構想していくうえでは、ワークショップの結果のみを評価するのではなく、その過程における細やかな事象を分析し、ファシリテーター・コーディネーター双方の役割と課題を明らかにしていく必要があるだろう。

¹⁰ SORI・・・Social Return on Investment（社会的投資収益率）の略。公益財団法人日本劇団協議会（2017）「文化庁委託事業 平成28年度戦略的芸術文化創造推進事業 ステップアップ・プロジェクト『芸術団体における社会包摂活動の調査研究』報告書」の中で、SROI は、「行政機関・企業・非営利組織等の活動に対して、財務的な価値のみでは測れない、社会的な価値を定量的に測る評価手法である。まず、活動に関与する利害関係者を明らかにし、利害関係者ごとのインプット（投入資源）、アウトプット（活動の結果）、アウトカム（アウトプットがもたらす変化）とそれぞれを評価する指標の設定及び評価を行う」と紹介されている。

¹¹ 公益財団法人日本劇団協議会（2017）「文化庁委託事業 平成28年度戦略的芸術文化創造推進事業 ステップアップ・プロジェクト『芸術団体における社会包摂活動の調査研究』報告書」

¹² 公益財団法人日本劇団協議会（2017）「文化庁委託事業 平成28年度戦略的芸術文化創造推進事業 ステップアップ・プロジェクト『芸術団体における社会包摂活動の調査研究』報告書」

特に、演劇ワークショップの社会包摂的側面として、「自己肯定感」や「安心感」を育むといったことが、言説レベルで期待されていることを前回の調査では明らかにした¹³が、その一方で、実際に、そうした場がいかにか構成されているのかを明らかにする研究は少ない。その点では、今回の手法は、過程に着目しながらワークショップ検証を行うということで、具体的に現場で何が起きているのか、またファシリテーターが意図していたことと異なることがいかに起きそれらが場においてどのように受け止められているのかといったミクロな事象を捉えることにつながったといえる。

一方、時間的な問題もあり、事前・事後のインタビューを十分に計画立ててできなかった点は反省としてあげられる。次年度の実施の際にはこうしたことも含め、検証に対して主催者の求めている視点は何か、アーティストが求めている視点は何か、協働先が求めている視点は何か、という点を事前にすりあわせてうえで検証の計画を立てて実施することが求められる。そのことは本事例に限らず、よりミクロに演劇ワークショップで起きている事象を捉えていく際に必要なことではないかと思われる。

¹³ 長津結一郎・中山博晶・松井志穂（2018）「演劇ワークショップの社会包摂的側面への期待とその実際：特別支援学級における演劇ワークショップを事例に」芸術工学研究，29，九州大学大学院芸術工学研究院，pp21-31

研究メンバー（肩書きはいずれも平成31年3月現在）

長津 結一郎（九州大学 大学院芸術工学研究院 コミュニケーションデザイン科学部門 助教）

執筆：1、2-5、3、4、5-2

中山 博晶（九州大学 大学院人間環境学府 教育システム専攻 修士課程）

執筆：2-1、2-4、5-1、5-3

藤原 健司（九州大学 大学院芸術工学府 コミュニケーションデザイン科学コース 修士課程）

執筆：2-2、2-3

松井 志帆（九州大学 大学院芸術工学府 コミュニケーションデザイン科学コース 修士課程）

大浦 彩音（九州大学 大学院芸術工学府 コンテンツ・クリエイティブデザインコース 修士課程）

平成30年度 障害のある人を対象とした演劇ワークショップ 検証報告書

～福岡県内A小学校「演劇コミュニケーション講座」と、「スペシャルオリンピックス日本・福岡 表現プログラム」を事例に～

監 修 長津結一郎

執 筆 長津結一郎、中山博晶、藤原健司

編集協力 松井志帆、若生帆波、大浦彩音、後藤柊、森本かれん、樋田昌之

講座主催 福岡県立ももち文化センター

NPO 法人アートマネジメントセンター福岡（AMCF）

協 力 福岡県人づくり・県民生活部文化振興課

発行日 平成31年3月29日

発行者 九州大学大学院芸術工学研究院長津研究室

〒815-8540 福岡県福岡市南区塩原 4-9-1

Tel: 092-553-4648

Mail: nagatsu@design.kyushu-u.ac.jp